

2015年度  
授業評価アンケート集計結果(全体)

設問文	受講者数 別区分	全体 平均	強く そう思う	やや そう思う	どちら でもない	あまりそう 思わない	まったくそう 思わない	有効 回答数	無効 回答数
<b>1. 授業内容について</b>									
(1) 授業の内容に興味をもてた。	全体	4.20	43.9%	38.6%	12.8%	3.1%	1.6%	6,740	16
	100名以上	3.78	26.9%	37.9%	25.6%	6.1%	3.6%	309	0
	100名未満	4.22	44.7%	38.6%	12.2%	2.9%	1.5%	6,431	16
(2) 授業の内容は体系的でよくまとまっていた。	全体	4.25	46.4%	37.2%	12.3%	2.9%	1.3%	6,739	17
	100名以上	3.83	27.5%	40.8%	22.3%	6.5%	2.9%	309	0
	100名未満	4.26	47.3%	37.0%	11.8%	2.7%	1.2%	6,430	17
(3) 授業の内容は勉強の意欲をかきたてるものが多くあった。	全体	4.07	40.5%	34.7%	18.2%	4.6%	1.9%	6,727	29
	100名以上	3.62	23.1%	34.2%	29.0%	8.8%	4.9%	307	2
	100名未満	4.09	41.3%	34.8%	17.7%	4.4%	1.8%	6,420	27
(4) 授業の内容は量的に適切であった。	全体	4.21	46.4%	34.7%	13.8%	3.5%	1.6%	6,735	21
	100名以上	3.80	27.9%	39.0%	23.1%	5.5%	4.5%	308	1
	100名未満	4.23	47.2%	34.5%	13.3%	3.4%	1.4%	6,427	20
(5) 授業の内容はシラバスに沿ったものであった。	全体	4.30	49.4%	34.1%	14.7%	1.1%	0.8%	6,722	34
	100名以上	3.85	27.0%	42.7%	21.8%	5.2%	3.3%	307	2
	100名未満	4.32	50.5%	33.7%	14.3%	0.9%	0.7%	6,415	32
<b>2. 授業方法について</b>									
(6) 授業はよく準備されていた。	全体	4.39	55.7%	31.1%	10.5%	1.9%	0.8%	6,740	16
	100名以上	3.94	32.8%	38.6%	21.1%	5.2%	2.3%	308	1
	100名未満	4.41	56.7%	30.8%	10.0%	1.8%	0.7%	6,432	15
(7) 担当教員の熱意が感じられた。	全体	4.35	53.8%	31.1%	12.0%	2.1%	1.1%	6,732	24
	100名以上	4.00	37.5%	34.6%	20.4%	5.2%	2.3%	309	0
	100名未満	4.36	54.6%	31.0%	11.6%	1.9%	1.0%	6,423	24
(8) 授業のテンポや進行具合が適切であった。	全体	4.22	48.4%	32.7%	13.7%	3.3%	1.9%	6,734	22
	100名以上	3.83	30.5%	35.4%	24.0%	6.5%	3.6%	308	1
	100名未満	4.24	49.2%	32.6%	13.2%	3.2%	1.8%	6,426	21
(9) 担当教員の話し方は明瞭で聞き取りやすかった。	全体	4.28	52.5%	30.0%	12.5%	3.4%	1.7%	6,733	23
	100名以上	3.81	32.7%	32.7%	23.0%	6.1%	5.5%	309	0
	100名未満	4.30	53.4%	29.8%	12.0%	3.3%	1.5%	6,424	23
(10) 板書の仕方は適切であった。 (黒板を使用していない場合は「どちらでもない」を選択する事)	全体	3.96	38.0%	27.5%	28.9%	4.0%	1.7%	6,706	50
	100名以上	3.53	22.8%	28.7%	33.2%	9.4%	5.9%	307	2
	100名未満	3.98	38.7%	27.5%	28.7%	3.7%	1.5%	6,399	48
(11) 映像機器が効果的に使用されていた。 (映像機器を使用していない場合は「どちらでもない」を選択する事)	全体	3.92	38.3%	20.6%	37.9%	1.6%	1.7%	6,676	80
	100名以上	3.66	26.6%	26.0%	39.1%	3.3%	4.9%	304	5
	100名未満	3.93	38.8%	20.3%	37.8%	1.5%	1.5%	6,372	75
<b>3. あなた自身について</b>									
(12) この授業によく出席した。	全体	4.42	58.7%	27.7%	11.1%	2.0%	0.4%	6,712	44
	100名以上	4.23	49.4%	29.2%	17.5%	2.9%	1.0%	308	1
	100名未満	4.43	59.2%	27.6%	10.8%	2.0%	0.4%	6,404	43
(13) この授業には積極的に取り組んだ。	全体	4.24	47.7%	33.4%	15.3%	2.9%	0.8%	6,717	39
	100名以上	3.99	34.6%	36.2%	24.3%	3.6%	1.3%	309	0
	100名未満	4.25	48.3%	33.2%	14.9%	2.8%	0.8%	6,408	39
(14) この授業のために予習・復習をした。	全体	3.60	29.1%	26.2%	27.2%	9.9%	7.5%	6,710	46
	100名以上	3.45	24.7%	25.0%	28.6%	14.0%	7.8%	308	1
	100名未満	3.60	29.4%	26.3%	27.1%	9.7%	7.5%	6,402	45
(15) 受講態度はよかった。	全体	4.24	47.6%	32.7%	16.3%	2.6%	0.9%	6,688	68
	100名以上	4.03	39.0%	32.5%	23.4%	3.2%	1.9%	308	1
	100名未満	4.25	48.0%	32.7%	15.9%	2.6%	0.8%	6,380	67

編集・発行

中央学院大学 商学部報編集委員会

〒270-1196 千葉県我孫子市久寺家451 TEL: 04-7182-1441

# 商

CHUO GAKUIN UNIVERSITY

# 学部報

平成28年3月25日発行

商学部は公正な社会観と倫理観の涵養をめざし、徹底した少数教育を通じて実力と創造力をそなえた有能な社会人を育成することを目的とする

## From 商学部長

### 教養を身につける

商学部長 **高橋 律**

私の学生時代には教養と専門という二種類のゼミナールがありました。教養ゼミは本学のプロゼミナールに近いですが、各教員の専攻に応じた内容を展開して行っていました。私は商学部でありながら、「世界の民族音楽」がテーマのゼミに所属していました。ゼミは35期まで続き、卒業生が今でも定期的に集まっています。NHK連続ドラマ「あまちゃん」の音楽担当大友良英氏はこのゼミの後輩、宇多田ヒカルを見出した東芝EMI(当時)の三宅彰プロデューサー

は先輩です。ゼミの恩師の晩年の一言、「音楽から世界が見えてくる。それが学問だ。」この言葉は今でも忘れられません。幅広い知識から得られる物事に対する理解力や、社会生活に必要な広い知識を養うことができるのも、大学ならではの学びの一つです。今号は人文・自然科目ご担当の先生の特集です。皆さんにとっての生涯の師とも呼べる先生との出会いがあるかも知れません。



## Lecture

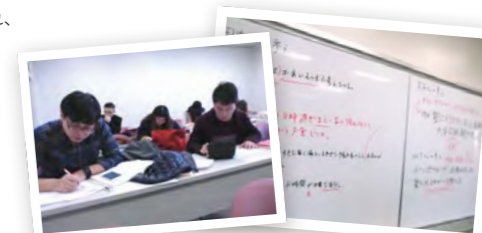
### 留学生日本語表現I・II

商学部准教授 **水藤 新子**

1年次必修科目である「日本語表現」は、6年前から日本人学生と留学生とを分けたクラス編成となり、留学生クラスは専任教員3名で担当しています。留学生は本学入学前に日本語学校へ通い、日本語試験や日本語能力試験を受け入学準備を重ねてはいますが、実際に大学の講義を受講するには及ばない点も多々見受けられます。新入生ガイダンスの一環としてプレースメント・テスト(習熟度テスト)を受け、個々の能力に合わせて4クラスに分かれて、日本語を「聞いて話す」クラスと「読んで書く」クラス、演習中心の授業を半期ずつ受講します。「聞いて話す」クラ

スは2クラス合同で八木先生が担当し、会話のストラテジー(戦略)を学びます。普段の生活で当たり前になる表現技術のあれこれ——お願いする、誘う、断る、ことづける、伝言する、意見を言う、助言する、申し出る、誉める、謙遜する、不満や文句を言う——を、ロールプレイングを用いて身につけていきます。「読んで書く」クラスは丹羽先生と水藤が1クラスずつ担当し、日本語表記の約束事を確認した上でさまざまな語彙や表現法を学びます。日常生活の中で目にするバリエーションに富んだ文章——手紙、説明書、意見文、広告、新聞、統計報告、エッセイ、論文——にふれ、

文献を探し試験やレポート作成に役立てる力を身につけます。1クラス8名前後という少人数のため、教員は学期開始からほとんど個々の学生の得手不得手を把握して、学習の方向を決めることができます。15回の授業の中、ロールプレイには学生全員が参加し、複数の文章作成課題をこなすこともできます。教員と学生、学生と学生がうち解けるのも早く、今日和気藹々とした雰囲気の中で授業は進められています。



## Lecture

### 大学は人との関わりの宝庫

商学部専任講師 **葉山 大地**

2011年の震災以来、絆(きずな)という言葉が強調されています。良い言葉です。その一方、「ぼっち」という言葉も最近耳にします。「一人ぼっち」から生まれた造語です。クリスマスを独りで過ごす「クリぼっち」なる言葉まであるそうです。人と繋がることは大切だけれども、繋がり方がわからない。そういう悩みをも

つ人が増えているのかもしれない。それでは、他者と仲良くなるコツはなんですか?私が担当している心理学の観点から、いくつか紹介したいと思います。1つ目は、表情やしぐさに気を配ることです。他者に与える印象の6割が、しぐさや表情などの視覚情報から決まるそうです。「メラビアンの法則」と

いいます。ポケットに手を入れたまま話したり、視線が泳いでいたり、笑顔がなかったりすると、気が付かない内に悪い印象を与えてしまっているかもしれません。笑顔は特に重要です。2つ目は、自分が話すよりも相手の話を聴くことです。質問上手は聴き上手です。相手に質問をしましょう。一言で答えら



れる質問を「閉ざされた質問」、回答の自由度が高い質問を「開かれた質問」と言い、後者の方が重要です。閉ざされた質問ばかりだと、尋問ようになって会

話が弾みません。開かれた質問は、「なぜ」、「何」、「どうやって」という形です。「映画面白かった?」より「映画どうだった?」という方が「開かれて」います。3つ



1 お互いをインタビューする活動を通して青年の心理を学ぶ (青年心理学の授業風景) 2 ゲーム形式のワークを通して、身体表現力を伸ばす (教職実践演習の授業風景) 3 聞き手に徹するという活動を通して聴く力を高める (生徒指導の授業風景)

## Lecture

### 地形や堆積物から読み解けること — 札内川の河床礫を事例に —

やまもと けんしろう  
商学部教授 **山本 憲志郎**

大学で担当している講義は人文・自然科学系列の「地球環境論」、「自然環境論」、「自然地理学Ⅰ・Ⅱ」や教職課程科目の「自然地理学概論Ⅰ・Ⅱ」などです。学生の皆さんにとって「手ごわい科目≒単位の取りづらい科目」というイメージが強いかもしれませんが、それは私たちの身の周りの「自然」や「環境」について、様々な情報から読み解く手法を知らないのに、十分に知っているような気がしていることに起因するのかもしれませんが(私も含めて)。でも時に、自然や環境を知らなくても日々の生活には困らないという態度が傲慢であったことに気づきます。自然災害や身の周りの環境変化に遭遇した時です。2011年3月11日の東日本大震災とそれに起因する原発事故は、私たちに「自然」や「環境」を謙虚に学ぶ必要性を

思い出させてくれたのではないのでしょうか。2015年9月10日、鬼怒川の氾濫によって茨城県常総市を中心に大きな被害がでました。常総市ではこの時の「洪水」による「土砂」が今も残されています(=「堆積」)。この事実は、河床の礫、砂や泥は洪水の時にしか運搬されないことを示しています。逆に堆積した土砂の特徴を調べると、過去の洪水の特徴(浸水範囲、水量や流向など)を知ることができるようになります。現在、私は洪水時に運搬された礫の堆積構造の特徴を、古流向や洪水によって運搬された堆積物とそれ以外の堆積物の区別を利用して研究しています。調査地は北海道・十勝平野を流れる札内川の中流(愛国橋付近)の砂礫堆です。この砂礫堆は2010年8月12日の強雨による河床礫の運搬

堆積によって形成されました(写真1)。きれいなインプリケーション(上流側に礫が落ち込む堆積構造)が発達しています(写真2)。この砂礫堆上に2m×2mの計測区画を設け、区画内から大きいと思われる130個の礫の最長の軸および最大投影面の最大傾斜方向(方位と傾斜)、3軸長を計測しました(写真3)。計測の結果と分析から、礫の形態や大きさが砂の洗掘によって礫の上流側に形成された凹みへの落ち込みやすさの違いに影響していることや、最長軸の方位の配列型は落ち込み時の傾斜の違いに影響している可能性があることがわかりました。これは「基礎的研究」の一例ですが、こうした研究が「自然」や「環境」を知る一助になると考えています。

写真1: 計測地点付近 (2010年8月18日)



砂礫堆上の流木から洪水がおきた直後であることがわかります。

写真2: 計測区画: インプリケーションの発達



礫が上流側に落ち込む堆積構造が顕著です。水流は左手側から右手側に流れました。

写真3: 傾斜角の計測方: 勾配計つきデバイダー



1個ずつ丁寧に礫の最大投影面の傾きを計測します。写真中の機器は自作です。

## Report

### AIB (Academy of International Business) 2015 Annual Meetingの参加報告

商学部教授  
チェ ジェ ジョン  
**崔 在 澿**

昨年2015年6月27日(土)から四日間、インドの南部都市ベンガルールで開かれたAIB (Academy of International Business)に参加してきた。インドの首都デリー (Delhi)を経由し移動したので、アスファルトが溶ける道路を目の当たりにし40度以上の熱波を感じさせられた。幸いベンガルールは高原地であり、メイン会場は世界の要人も宿泊したというリーラパレスベンガルールであった。ホスト校はインディアン・インスティテュート・オブ・マネジメント・ベンガルール(IIMB)で、「グローバルネットワーク (Global Networks: Organizations

and People)」という共通テーマで数多くの報告があった。当初、組織と人的資源管理の側面からビジネスを捉えるテーマなので(サブタイトルからも分かるように)、企業の戦略的行動に関心を持っている筆者としては学会の参加に迷いがあった。しかしながら、ネットワークというメイン・タイトルに魅せられ、学会に参加することにしたのである。本報告では学会参加後に生まれた素朴な疑問や初めて訪れた新興国市場としてのインドについて簡略に纏め、報告書と代えさせて頂く。



インドの地形と交通網

### 【新興国市場インド、新旧の葛藤バンガロール (Bangalore) or ベンガルール (Bengaluru)】

バンガロール Bangalore /bæŋgəˈlɔːr/ (米国英語)  
ベンガルール Bengaluru /bɛŋgəˈlʊːr/ (カンナダ語で豆の町)

(インドの首都は「ニューデリー」か「デリー」かのよう(に)バンガロールなのか、ベンガルールなのか?実は2006年11月、州政府(カルナータカ州Karnataka)が植民地時代から付けられたバンガロールを改名し発効したのが「ベンガルール」である。

しかし、政府の内務省から認可が得られず2014年11月になってようやく認められた。定着するまで時間がかかるだろうし、しばらくは両地名が混在するであろう。いずれにせよ、ベンガルールはインド南部・庭園都市ともいえる高原都市である。インド独立後国営の重工業、航空産業、防衛産業の工場群が置かれたところで、インドで第3番目の人口を有する。現在はインドIT産業の中心地「インドのシリコンバレー」である。筆者が宿泊したホテルから会場までは約5キロも離れたところであって、その途中には緑豊かな広い施設があった。言わば、キャンタウメント(cantonment)というイギリス軍の跡地であり、伝統的な衣装であ

るサリー (sari) 姿より自由な服装の人々が多かった。2014年春、インド人民党を率いるモディ首相の誕生以来、「メーク・イン・インド」というシンプル・フレーズで改革を行っているインドでは、伝統的なナショナリズムと革新的合理性とのあいだで葛藤するかのようである。

### 【人・組織のネットワーク、印僑】

(「中華料理」なのか?「中国料理」なのか?のように)華僑と華人という人のネットワークに関連する用語がある。外国に住みながら中国国籍を保持する人を華僑といい、移住先の国籍を取得した人を華人という。インド出身の海外駐在者 (expatriates) の場合、華僑 (華人) のような区別はしないものの「印僑 (いんきょう) (Non Residential Indians)」と呼ばれるようである。移住先でネットワークを作って移住同族者の強固な連携を生み出しているが、インドの経済成長に伴い、人も資金も逆流する傾向にある。

可能性を秘めている巨大市場を巡って、インド国内企業vs.外資系企業(日本企業含む) vs.逆流印僑系企業の競争が激しくなるのは必至である。インド市場に参入し、日本的経営を展開しようとする企業はどのような課題に直面しているのか?その中には日本的経営の国際移転もあるだろうが、人

材不足も取り上げられる。欧米市場を開拓するために自ら海外駐在を志願した時代と異なり、海外赴任嫌いの若者が増加している昨今、印僑のような人材を確保し人材派遣事業を行う企業がかつての商社の役割を担うであろう。懇親会会場 (Tamarind Tree, Bangalore) で日本的経営のインド市場への移転をすべきか否かについて、参加されていた先生と議論したことが思い出される。このたび、このような機会を与えて頂いた諸関係者に深く感謝申し上げます。時間の許す限り [www.youtube.com/watch?v=5mlvJbZfUCQ] をご覧頂いたら幸いです。



懇親会会場 Gala Event at the Tamarind Tree 入口で南部民族衣装を身にまとった方々から歓迎を受けた

## Report

### Winter Simulation Conference 2015の参加報告

商学部准教授  
タン エキ シ  
**譚 奕 飛**

システムシミュレーション (Systems Simulation) とは、現実世界に起きる様々な事象やプロセスの実行をコンピュータでシミュレーションし、既存システムの問題点を洗い出し、さらに問題を改善・解決するための代替案を考案し実験するためのアプローチです。Winter Simulation Conference (WSC) はシステムシミュレーション分野に関する世界最大規模の国際カンファレンスであり、1967年ニューヨークで創設されて以来、ほぼ毎年12月に米国各都市で開催されてきました。

2015年12月6日から9日までの4日間、米国カリフォルニア州Huntington Beach市で開催されるWSC 2015に参加してきました。今回のカンファレンスにおいては、世界各国の大学や研究所などの学術界と民間企業などの実業界から、750人を超える参加者で賑わいました。大会の統一テーマは、Social and Behavioral Simulation (社会と行動のシミュレーション) です。基調講演は、革新的イノベーションと称されるAgent-based Modeling手法を確立させた第一人者である、米国ジョージア州ジョージア州緊急医療部のJoshua Epstein教授により行われました。その後、20のトラックから500本以上の研究が連日に渡り報告され、論文として収録されました。私はおもに自分の研究テーマに関連する「Logistics, SCM and Transportation」

や「Big Data Simulation & Decision Making」、[Business Process Modeling]等のセッションに回って発表を聞きました。WSC 2015では、研究者だけでなく、大学院生や学部生による発表も活発に行われていたことが印象的でした。大会では大学院生を主体とするポスターセッションを設けてあります。学生は自分の研究を1~2枚の大型ポスターに描きまとめ、会場の廊下に設置したボードに貼り、そばに立って待機します。大会参加者は自由に各発表ポスターの間を読み渡り、疑問点やアドバイス等があったら待機している学生に質問し交流します。このように、研究発表の会場では、活発な議論が行われていました。

WSCは国際カンファレンスとして世界中から研

究者と実務家が集まる大会ですが、日本からの参加者と発表の数が比較的少ないことは、やや気がかりなことです。欧米の大学、特に大学院のMBAコースでは、シミュレーションという科目は経営科学の重要な手法の1つとして認識され、必修科目に指定する大学が多いです。また、企業においてシミュレーションは分析のツールとして業務改善で多用されているようです。今大会では、同じアジアの中国とシンガポールから数多くの発表がありました。このように、今回の学会参加は、いろいろな発見と刺激を受けることができた貴重なチャンスでした。このような機会を与えて頂いた諸関係者の方々に深く御礼申し上げます。

